

授業方法について独自に工夫していること 【人文社会学系】

グループ分けをして、1班は事前に指導する。

ガバンスコース内に英語を書く練習をするための授業がないため、英作文の授業を行った。ただし、ガバンスコースでは英語の教員の資格は取れないので、将来何らかの役に立つようにと考えて、電子メールを書くという実用面を重視した授業を行った。

受講者自身に問いが浮かび、授業内で解決できる循環が生まれるように工夫している。

英語文学の授業で敬遠されがちな精読に重点を置き、言葉のリズムや意味の複数性、語りの技巧等に対する学生の「気付き」を大切にしている。また、同じテーマや対象が、異なる作家によってどう表象されるかを体感し、考えることができるような教材を工夫している。

独自に作成したハンドアウトの配布。

レポートはフィードバックをした後、修正させて、再度提出させている。学生の発表により授業を進めている。

教科書の内容にプラスアルファの知識が身につくようにプリント教材を準備している。

日本語や英語から見て異質な言語であるロシア語の学習をとおして外国語学習に何が有効かを改めて考えてもらえるようにした。また、せっかく学習した初習外国語の知識を整理し、発表してもらうことでさまざまな外国語の特徴について知識として得られるようにした。

学生は教員の指定したリストから発表論文を選ぶ形式のため、論文リストの選択と発表時における疑問点の説明に工夫した。

今年度の「3503241」の方の試みとして、10回程度ミニレポート提出の機会を設け、学生がそれぞれ出す回数を選択して提出し、かつ毎回すぐに採点・返却し授業の中で発表させることで還元するという形式を用いてみた。学生としては、一種の「点取りゲーム」(積極的に参加することで、点数をかせぐのが可視化)的に参加できたようで、課外学習時間をふやし、かつ楽しんで参加できたようだった。

グループ発表形式にし、発表グループは事前に話し合い各自担当箇所を準備し、ハンドアウトを作成し、それに従って発表する。準備の段階で、作品を表面的に読むのではなく、その背景を踏まえつつ独自の解釈をすることを求めた。発表後、質疑応答時間を設け、他の学生と疑問点等を議論し、さらに深く内容を理解し合う等、積極的に授業参加する形式にしている。

毎回、学生に関連する論文を読んでこさせて、発表させる。それに基づいて、全員で議論し、次回までに行うべきことを明確にする。

漢文の読解力、理解力向上を目的とする授業なので、たとえ難しい文章であっても、演習形式による受講生との個々のやりとりの中で受講生自身が正解へとたどりつけるよう努力している。

事前に資料と課題を与え、自分の考えを準備して授業に臨むよう指示している。
授業の時にはできるだけ教員からの一方的な話を避け、学生に問いを投げかけて学生自身が討論して考えをまとめるという進め方で進めている。

演習の場合には、発表担当の学生と、必ず事前の打ち合わせをしている。

本授業は演習形式の授業である。学生は自らの課題について調査・考察したことを、他の学生や教員の前で発表し、それについて意見交換・議論を行うという形で進めていくものである。ただ、その場合、発表担当になった学生はその授業に積極的に参加することにはなるが、発表を担当しない聴衆側の学生の場合、積極的に参加する意欲がないと、授業時間のあいだ席に座って漫然と過ごすことになりかねない。特に本授業は受講者数が非常に多いため、意見交換や議論において発言を自主的なままで任せてしまうと、発言しない学生ばかりが増えてしまうことになる。
そこで、本演習では「シンポジウム」形式を取り、発表者(複数名)をパネリストとして扱い、毎回「討論者」を決め、その討論者は必ず発言させるようにした。そして、受講者の全員が発表者と討論者をそれぞれ1回ずつは引き受けるように割り振り、積極的に授業に参加する環境作りをした上で、演習を行った。もちろん、討論者以外の発言も(時間の許す限り)許容した。
このやり方は概ね成功したが、自分の発表日に欠席する学生が多く、限られた授業時間数の中で全員に発表させることが容易ではなかった。

(1)(2)(3)全てに通じて、必ず学生からのリフレクション・意見シートを書かせ、次の時間に反映させるようにしている。

学生のリアクションペーパーに対して毎週、返答を書いて、返却しています。学生の理解の不備、質問などに回答します。多くの人に聞かれた質問、興味深い質問は、次回授業で取り上げ、教室全体で理解を深めるようにしています。

一般的なレクチャーにおいて配慮すべきことを超える、特記すべき工夫はできていないと評価している。

学生が受け身にならないように、授業はグループで調べ議論することを中心に進めた。また、次回の授業までに読むべき教材を配り予習を課した。

全15コマの授業にて、前半7コマは基本知識の習得および整理に焦点を当てる。8コマ目が中間テスト。後半7コマは社会背景および構造要因の説明に集中し、うち1コマは学生間でのディスカッションとショートプレゼンテーションに当てた。

学生が高校まで親しんできた「感想文」とアカデミックライティングの違いについて学ぶ時間を多めにとり、本授業のみならず今後のレポートや卒業論文に対応できるようにしている。
毎回コメントシートを書いてもらうことで、授業に対する学生の意見、批判、質問などを確認し、翌週以降の授業に反映させている。また発表者に対する質問が出にくいので、発表者への質問、発表内容の評価をまとめるグループワークをさせ、それを授業内で共有するようにしている。

直近の新聞記事を導入で使用し、関心を引くようにしている。

概説Ⅱについては毎回、講義内容を要約したプリントを配っている。
演習については教育実習を意識させるために担当者に板書することを求めている。

パワーポイント使用し、グラフや図、動画などを多用してわかりやすく授業内容を提示した。
できるだけ最新の研究成果を題材とした。

音声学については、授業内容の性質から、受講生には授業外での課題をできる限り課し、併せて、教員からは、個々人の内容に対応したフィードバックをするようにしています。また、口の中の動きについては、視覚的に理解しやすいように、映像を適宜用いています。
英語学演習については、卒論に取り掛かるうえで必要となるデータ分析の知識・技能を身につける必要がありますので、実際にパソコンを用いてその演習を行っています。また、レポートもその形態に近いものにしていきます。

当り前のことであるが、1回の講義で扱える(学生にとって受容できる)内容は、教員が思っているよりも少ないものであるから、まず扱う題材(根拠と論理によって説明しようとするもの)をセレクトし整理して、聴講する側にわかりやすくするよう努力することである。

英語文学の講義科目であることを念頭に、最初に大まかなポイントおよび歴史的背景を英語で説明し、それを踏まえて個別の文学作品の分析や解釈については、英語と日本語を交えて学生の理解を見ながら講義を行っている。これにより、英語の四技能のうち、読むことに偏りがちな文学の授業で英語を聴く機会を増やすことができる。また、必要に応じて学生間の意見交換、グループ討議の時間を設け、一方的な講義にならないように心掛けることで、アクティヴ・ラーニングにも資すると考える。

日本語教師の資質・能力の基礎を養成するために、教育実習を取り入れた。この教育実習は学生が教師役と学習者役になって行う模擬授業である。初級の日本語教科書の12課を教科書分析に基づき、学生主導で模擬授業を計画して、実施した。ここでは、模擬授業実施後に、ディスカッション、フィードバックシート、省察、レポート等、多くの振り返りの機会を設けた。この振り返りにより、非熟練教師である学生が自身の良い点や改善点に気づくことができるようにした。

どのような基準で学業成績の結果を出したか。 【人文社会学系】

レポートとテスト半々が基本だが、出欠も加味した。

授業期間内に3回の小テストを行い、それに基づいて評価した。

授業の目的に応じて受講状況を把握し、筆記試験またはレポートにより、内容の理解度、目的の達成度に応じて評価を行った。

発表: 20点、中間試験: 30%、期末試験: 50点、授業への積極的な参加: 10点

レポートによる評価。
レポートを読んだ上での主観的印象による評価。

授業内の発表(30%), レポート(60%), 卒業研究中間発表会あるいは卒業研究発表会への参加(10%)
出欠や遅刻状況を加味して客観的に評価した。

教科書やプリント教材で扱った知識を覚えたかどうか。

ロシア語については文字と基礎的な文法をきちんと覚えたかどうか。初習外国語に関しては、聞く人の知識に配慮しながら発表ができたか。最後のレポートでは、教科書の論点に即して日本語の特徴をまとめることができたか。

発表時における論文内容の理解および批判的考察の度合い、さらに討議への参加状況を基準として評価を行った。

試験による場合は、平均点が60点程度になるように気をつけた上で、なるべく学生が納得できるよう、点数のままにつけるようにしている。模範解答も解説つきで提示している。
透明性と試験結果のふりかえりによる学習が大事であると考えている。

成績は、下記3点の総合評価です。
1.発表: 音読、訳、コメント(分析)、質問への受け答え 20%
2.レポート 60%
3.授業への積極的な参加 20%

授業への積極的な取り組み、授業外でのレポート作成、毎回の発表。

出席・担当・授業参加態度40%、小テスト10%、期末筆記試験50%の総合評価。

与えられた課題に対する準備状況(課題提出物を提出したか、自分の考えをまとめてきたか)
授業中の討論を通じた考えの深化

事前の打ち合わせの状況、発表の内容を踏まえ、総合的に評価している。

成績評価の方法は、第1回の授業において最初に示した。以下の3つのポイントの達成度から総合的に判断した。

(1) 研究発表の内容(課題クリアの是非、問題提起の鮮やかさ、論理的な明快さ) 40%

(2) コメント(研究発表者に対する反応)の内容(テーマに対する当事者意識) 20%

(3) 学期末レポートの内容(考察・分析の深さ、論理的な明快さ) 40%

(1)については、単に対象分析だけに留まらず、より普遍的な問題へアプローチする潜在性を有しているかどうかを評価対象とした。また、聴衆の理解の進捗や問題意識の共有を意識したプレゼンテーションが行えたかどうかについても評価対象とした。

(3)については、(1)の研究発表をただ文字化するだけでなく、いかにレポートや論文としての整合性やまとまりを追求することができているか、(1)から更なる発展的な考察が行われているか、なども評価対象とした。

結果として、SからCまで適度に分散した。

(1)は、講義形式が主であったので、意見文とレポート内容を基準に成績を出した。

(2)(3)は、学生の発表・レジュメの準備過程・レポート・意見(リフレクション)シートを総合的にみて成績を出した。

7割は筆記試験の点数で出しました。残りの3割は、学生の授業への参加度を加味しました。この参加度はリアクションペーパーへの取り組み具合、授業をちゃんと聞いているかを問いました。この記述が十分でない際は、減点しました。

1) 行政法学におけるこれまでの議論の内在的な理解がなされているか

1') 上記1)の内容に対する批判的な検討がなされているか(なくてもよい)

2) 実際の社会事象における1)を用いた問題発見がなされているか

3) 問題に対する1)を適用した分析がなされているか

授業への参加度やコメントシートの内容、及び期末レポートを総合して評価した。

出席および中間テストで60点満点。期末レポートにて40点。

レポートの評価に際しては、参考にした文献の概要説明につきポイントを的確に整理できているかに着目し、それに沿って自分の考えを示せているかを重視した。

出席・授業態度・討議への参加・コメントカード内容10%、発表資料および発表時の態度40%、くずし字読解能力10%、期末レポート40%。グループ発表については、きちんと問題意識を持って担当箇所本文比較、注釈、現代語訳を行っている学生には30点以上の点数を与えた。期末レポートについては、古典文学に関わるテーマを設定し、先行研究5つをふまえて自分の考えをまとめるという内容とした。先行研究としてWikipediaやキュレーションサイトを利用した学生については低評価とした。

講義内容をちゃんと聞いているか、正確に理解しているか、を基準としている。

概説Ⅱは定期テストと出席状況、演習は定期テストと出席状況に加えレポート。

授業への参加頻度(出席日数)が30%、中間・期末筆記試験が70%として、5段階評価(S・A・B・C・D)を行い、点数化した。

日々の課題、小テスト、最終レポート等を総合して結果を出しました。
授業参加、小テスト、最終レポート等を総合して結果を出しました。

講義の内容をどれくらい理解して、それを自分の言葉で説明できているか。試験の場合でもレポートの場合でも同じである。その基礎がしっかりしていれば、その上で自分なりの意見や調べたことにも評価点を与える。

二回のレポート(各20点)、参加点(10点)、期末試験(50点)により成績を出す。レポートについては、内容(10点)、論理性(5点)、形式(5点)とした。

模擬授業の準備、実践、その後の振り返り等の総合的な評価。特に毎回行う実践者へのフィードバック、また、自身の内省等がきちんとできたかどうかを基準とした。授業中の積極的な姿勢も評価した。

アンケート結果を受けて改善したいところ 【人文社会学系】

このままでいいと思う。

授業の難易度と分量に関しては8割程度の学生が丁度良いという回答であったので、テキストの選択はまずまずであったと考える。ただし、若干名やさしいと感じた学生もいたので、今後はもっと相応しいテキストがないか検討したい。恐らく他の質問項目における否定的な回答もこの点と関わっていると思われるので、慎重に選定していきたい。

講義形式の授業は、概して演習形式のそれに比べて受講者の積極的な授業参加の様子がうかがいにくい。なぜそれを取り上げるのか理解を深めた上で入ったり、自身の頭で考える機会を設けたりすることなどによって、工夫を心掛けたい。

「教員の話し方は聴き取りやすい」という問いに対する評価が比較的低いので、授業中に学生の理解度を確認する機会を増やすなどしたい。

学生自身が自ら学べるような助言をしていきたい。

教科書を読んでくることを前提に授業を行っているが、それだけではなく、明確な課題を出して、授業でそれを問うというやり方も行わないと学生の学習時間が増えないと感じた。

外国語学習においては何がつまづきの原因になるのかという点について、学生自身が体験した事例に基づいて考察をさせることが必要だと感じた。

週当たり学習時間をみると、もう少し難度を上げて良いと思うので、次年度は、発表時の様式に工夫することとしたい。

講義(2単位)の科目において、本来の単位の条件にあたる課外学習(問15で問われるもの)がまだまだ不十分だと思われる。授業での課題の出し方を工夫して増加させたい。

改善すべき点は、2点です。

1. 発表後に、疑問点等について活発な議論をする機会が少なかったため、時間配分と事前に教授者より議論する課題を提示する等の改善が必要です。
2. グループの発表を主とし、教授者の解説が補足程度になってしまいました。この点も時間配分の改善が必要です。

「この授業で新しい考え方や知識・技能が身についた」、「学生どうして授業内容について話し合った」、「授業を受けたことで、多様な考え方ができるようになった」などの項目で平均よりも低かった。今後は、新しい考え方や知識・技能が身につくように工夫したい。

授業で扱うテキストについては、受講生にとってもう少し読みやすいものとなるよう考えていきたい。

授業の難易度について「難しい」と回答した学生が23%(13人中3人)だったので、難易度を見直したい。

国文学演習B I では、「この授業の学習目標が達成できた」の項目において、「強くそう思う」の数値が低かった。得られた学習成果について、満足度が低いものと考えられる。事前の打ち合わせ等を通して学習の成果を感じ取ることができるよう、今後の指導を改善していきたい。

「問1 この授業で、新しい考え方や技能が身についた。」や「問6 授業を受けたことで多様な考え方ができるようになった。」などで9割近くの学生が肯定的な回答(①強くそう思う、②ややそう思う)をしたことは、授業担当者としてある程度課題が達成できたと感じている。
ただ、演習形式の授業としては受講者数が多過ぎで(50名近く)、本来の演習形式の授業の醍醐味(十分な議論の豊かさ)を学生に感じさせることができなかつたことは残念である。この点については工夫もしたし、教員として反省すべきことはないのだが、もっと適正な人数での授業を行いたかつた。
あと、自由記述で「延長するのをやめてください」という意見が1件あつたが、受講者数が多く、1回の授業での発表者が自然と多くなってしまうので、時間調整が難かつたというのはあつた。時間内に終わらせるか、十分な議論の時間を確保するかの問題である。この点についても、適正な人数での演習が行われれば解消できる問題であろう。

(1)~(3)全ての授業において、もう少し、学生同士の議論の時間を確保し、考えを共有するように授業を改善していきたい。

教員と学生間の対話はできているとは思いますが、もっと学生同士の対話を促すような授業展開をするべきであつたと思います。

今回の受講者数(規模)において講義を行うことは、自身にとっては、大学の内外を問わず初のことであつた。同様の機会は、今後想定しがたいところではあるが、この経験は自身にとり貴重かつ有益であつたことは間違いない。強いていえば、1970年前後の大学における教育のあり方の議論を、再度参照しようという念を抱くに至つた。無論、今回の講義規模のほうが適切であるという認識に基づいてである。
講義への参加、そしてアンケートの回答を行ってくれた受講者各位に、心より御礼申し上げます。

授業中のグループでの話し合いにおいて、グループによっては話し合いがうまくいかなかつたという意見があつたため、改善策を考えたい。

学修目標のさらなる明確化が必要だと感じる。また、学生とのコミュニケーションにかかる方法の模索を行いたい。

難しいという意見が多かつたので、課題の難易度については再考したい。

授業のための週当たりの時間が少ないのが気になる。宿題をふやしたい。

授業で提示するスライドを精選し、学生が参加する時間を確保する。
講義式が中心だつたので、AL形式の授業を増やす。

音声学については、授業の難易度や授業内容の量が「ちょうどいい」という意見が非常に多かつたが、力をつけろという意味では、物足りないのではないかと思います。そのため、もう少し難易度を上げ量を増やすことが必要と思いますが、その分、こちらの添削にさらに時間がかかるのが悩ましいところです。
英語学演習については、受講生は文系のため、統計の内容はなじみが薄く難かつたと思います。そのため、授業内での作業をもう少し、システムティックにできるようにしていこうかと考えています。また、もう少し小テスト・小課題を行つて、知識・技能の習得ができるようにしていくことを考えています。

1人で全体の講義を進めた場合はともかく、複数の教員が交替して講義した場合には学生の戸惑いもあったのか、授業評価の結果は芳しくないものになっている。

小中学校の教員となる以上、幅広く学ぶことは必要であり、この形をくずすことはできないが、より教員間の連携を密にして、学生が聴講しやすい環境をつくっていききたいと思う。

「教員の話し方は聴き取りやすいか」という問いに対する評価が比較的低いので、英語で説明する部分が上手くいっていないのか、日本語の部分なのか、今後より詳しく調査する必要がある。また、その点をどうしたら明らかにできるのか考えたい。

授業の目標が、教育の資質／能力(授業の到達目標)のどのあたりをめざすか等について、客観的に設定できたらよかったと思う。模擬授業を行う場合、教師役の指導が中心になることが多いが、学習者役の指導をもっと充実させるべきだった。学習者役の指導というのは、「日本語学習者の間違いや理解しにくい点を予想して、間違えるなどの演技をすること」である。日本語学習者と接する経験がほとんどない学生には、とても難しいことであるが、これを考えさせることは重要で、この授業の課題となった。